

平成27年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：平成27年4月～平成28年3月

1. 学校概要

学校名 社会福祉法人聖愛学舎もみの木保育園 太子堂
 種 別 ☒ 保育園・幼稚園 ☐ 小学校 ☐ 小中一貫教育
☐ 中学校 ☐ 中高一貫教育 ☐ 高等学校
☐ 教員養成 ☐ 技術/職業教育
☐ 特別支援学校 ☐ その他 ()
 所在地 〒154-0004
世田谷区太子堂 1-12-18
 E-mail taishido@mominoki.ed.jp
 Website _____
 児童生徒数 男子 57 名 女子 68 名 合計 125 名
 児童・生徒の年齢 0 歳～6 歳

2. 実施活動（複数選択可）

- ☐ 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- ☒ 国際理解
- ☐ 世界遺産
- ☒ 平和・人権
- ☒ 環境
- ☐ 気候変動
- ☐ 生物多様性
- ☐ エネルギー
- ☐ 防災
- ☒ 食育
- ☒ 伝統文化
- ☐ そのほか ()

3. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

(平和・人権、国際理解)

目的

- ・日々のお祈りの中の言葉“人に気持ちよく”とはどんなことを考え行動し、人に繋げていく。
- ・世界に目を向け、自分たちに何ができるかを考える。

○ワールドビジョンの方の話

今年は9月2日・12月2日の2回、ワールドビジョンの方々に来ていただき、世界の現在についていろいろと話を聞く機会があった。自分たちがいかに恵まれた環境で生きているのかを実感すると共に、ご飯も水も満足に得られない事が信じられない様子もうかがえた。そんな中で、自分たちが今出来る事は何かを考えるきっかけとなった。



あまりにも、今の自分たちとの生活とかけはなれた状況だったので、想像することは難しいのではと感じたが、子どもたちなりに心に響いたようだった。

そこからは、ご飯やおやつが毎日しっかりと食べられること、友だちと毎日楽しく過ごせること、水が不自由なく使える事に感謝する気持ちが生活の中で出てくるようになった。しかし、時間が経つとまたそのようなことが“あたりまえ”になってしまうので、そのあたりまえが幸せな事であることを忘れずに過ごせるようにしている。



特別な活動はしていないが、手を洗う時に水を出しっぱなしにしない、ご飯を残さず感謝の気持ちをもって食べる。ティッシュを無駄遣いしないということをクラス全体で心がけるようになった。また、年齢の高い児のクラスでは、子どもたちが自分には、なにが出来ると思うかを真剣に話し合い、「許してあげればいい」「喧嘩(戦争)はやめなさいって(私たちが)言いに行く」などの意見が出た。他にも「食べ物を持っていく」「水を送る」「土を掘って水を汲む」「土を掘る為のドリルをお父さんが持っているから」「そのドリルを持っていくのは誰?」「飛行機に載せて宅急便でそこまで持っていく」などというディスカッションが子どもたちで展開され、驚きであった。今、この場だけでなくこのように「世界」に目を向けることはとても大切だと感じる。

○ラブギフト

ワールドビジョンのラブギフトに参加した。まずは職員からと考えて、職員に呼びかけた。個々の気持ちという事で、一口の金額を 300 円と決め、寄付を募り、豚を 3 頭送る事が出来た。



(環境)

目的

- ・動植物に積極的に関わり触れることでいのちの大切さを知る。
- ・自分の周りにどのような環境があるのかを知り、感じる。

○ゴーヤのカーテン

夏の直射日光を和らげるため、ゴーヤを育てて自然のカーテン作りをした。南側の窓一面にゴーヤの葉がかかろう植えていき、8 月には 2 階までつるが伸びて 1、2 階両廊下の窓から、いつでも間近で観察できるようになっていた。



言葉を覚えてばかりの子

どももゴーヤや葉っぱを指さしながら「ごーあ(ゴーヤ)」「はっぱ」と口々に言い、興味を示していた。また「ゴーヤがあるから影があって涼しいね」と保育士が促すことなく、子どもたち自らで感じていた。夏の終わりには青色のゴーヤや黄色のゴーヤ、種を収穫し、回覧を行った。

植物の成長を見ることができたと共に自然な方法で快適に過ごす方法を体験することで、機器に頼るだけではない生活を考えることができた。



○朝顔を育てる

去年は、屋上園庭の同じ場所に苗を植えて育てたが、今年は、種から朝顔の成長の観察を行う。植える前の朝顔の種を興味津々に見ていた。

子どもと一緒に種を植え、水あげをする。屋上に行くとも成長を楽しみに観察していた。



土壌の状態があまりよくなかった事と、夏が早く涼しくなったことの影響か、育ちがあまりよくなかった。

しかし、小さいながらも花が咲き、子ども達と花を摘んで、色水遊びを楽しんだ。花が好きな子ども達であったので、花摘みは本当に楽しんで行っていた。

また、咲き終わった花からは、種を見つけ、種取りも楽しむ事が出来た。



○ハーブ栽培

屋上園庭の花壇にハーブを植えている。

子どもたちは、保育士がミントに触って子どもの鼻に近づけると、真似をして嗅いでみる。

保育園で一番年齢の低い年齢の子どもたちだが、日頃からハーブの緑に接し、保育士と一緒に香を感じることで香に関心を持ち、身近な物になっている。



○自分の石を見つける



【1歳児】

「これ（保育者が持っている小石）と同じと思う物を持って来て」と子ども達に伝え、すぐに探しに行き、「あったよ！」と嬉しそうに見せに来た。



丸いものや大きなもの、1人1人集めるものが異なり、いくつも夢中になって探している。大体の児が石をポケットに詰めたり、集めたものを見たりしていた。木の根に石を置いて「いいものを集めているの」と並べる児もいた。他児のしているのを見てとなりで同じように並べる児もいた



なんの変哲もない石を、子どもたちは丁寧に扱い、順番にこだわって並べていく。「ケーキを作っているの」と、見立て遊びも始まって、楽しい時間が流れた。帰る時に「気に入ったものを1つ選んで持って帰ろう」と伝えとそれぞれが真剣な顔でとっておきのひとつを選び、「ママに見せるの」と嬉しそうに持ち帰った。

○街の地図

ある日、年長の子どもたちは、栄養士に頼まれて、パン屋さんにお使いに行く事になった。誰かに頼りにされるって、なんだかすぐたいような感じ。子どもたちは張り切って初めてのお使いに出かけた。

給食のパンを作ってくれているパン屋さんは、大きな通り沿いをだいぶ歩いた先にあった。「ここ、お母さんと来たことある」「給食のパンはこのパンだったのか」そんな事を話ながらいよいよお店の中へ入る。



「いつもおいしいパンを

ありがとう」緊張気味の子どもたちにパン屋さんは子どもたちが持ちやすいように小分けの袋を用意してくれた。

別の日、今度は八百屋さんにお使いにいった。パン屋さんとは、違う通りを歩いていく。

子ども達には馴染みの商店街だが、園の給食と結び付けて考えたことはなかった。ここから届いた野菜で給食が出来ていると思うと、お店が親しく感じられる。

お店の人から野菜の袋を受け取るのも、大切な役割を果たしているという特別な気持ちだ。





八百屋さんの隣には、お肉屋さん、魚屋さんがあって、2軒とも園に食材を届けている。子どもたちは、担任からその話を聞いて、元気に挨拶をして園に戻った。

お使いにいったことで、子どもたちは、街の様子に興味を持ち、行ったお店を含めた園周辺の地図を創ろうということになった。



色画用紙やお花紙、段ボール紙等思い思いの紙を使ってグループでお店を作り、一枚の模造紙に道を描いて貼り付けていく。「ここに信号があるよ」「こっちにお花屋さんがあった」話し合いながら標識や脇道も加えていく。

よく知っていると思っていた街も、地図にしてみると新しい発見があり、また体験を別の形に表してほかの人とも共有できることが分かった。子どもたちの歩いた街の“体験地図”ができた。



○サウンドマップ

【年中組】

子どもたちと公園に出かけ、サウンドマップを行った。

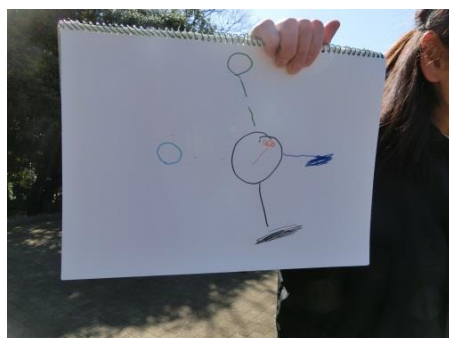
まずは耳に手を当てて、方向を変えながら前の音、横の音、後ろの音に集中する聞き方を知る。子どもたちに何が聞こえたかを聞き、地図にしてい

く。こどもたちは聴覚を働かせ、聞こえたものを自分なりに記号化して音の方向を示しながら図に表していく。

一回目はみんなで一枚のマップを作った。一人ずつ前に出て、気づいた音を書き込んでいく。みんなに自分の気づきを知ってもらえる喜びを味わい、自分が気づかなかった音もマップに書き込まれていく。



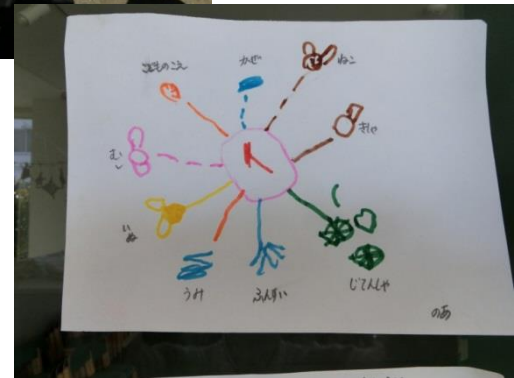
ここにいる仲間が聞いた“今きこえる音”を共有し、目に見える形にすることが出来た。次回は一人ひとりが作る事を約束して終了した。



二回目も同じ公園で行った。「今日は自分の（マップを）描くんだよね」と楽しみにしている様子が見られた。中心に自分の位置を表す円を描き音を聞く。音を表すのにふさわしい色を選びながら、聞こえた音を描いていく。



「これは何の音？」と聞くと、「カラスの音」「ピンポンパンポン（公園の案内放送）」という現実の音に混じって「海の音」「蟬の音」という、現実には聞こえない音も混ざっていた。現実、記憶、ファンタジーが綯い交ぜになって楽しさを感じている、4歳児ならではの遊びの世界だ。色分けをして描いたマップはその子にしか描けないサウンドマップになった。



○おはなしのろうそく～100万人のキャンドルナイト～

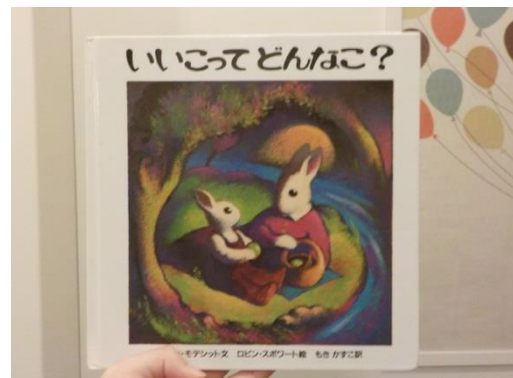
“100万人のキャンドルナイト”に合わせて絵本の読み聞かせを行った。落ち着いたいつもと違った雰囲気を出すこと、子どもとの距離を物理的にも精神的にも近くすること、を目的として活動を行うことにした。

キャンドルナイトについて、「夏至と冬至の日の8時から2時間、みんなで電気を消しましょう、というのがキャンドルナイト。どうして電気を消すと思う？」と話しをした。「節電」「落ち着くため」「静かにするため」と様々な声があがり、どれも正解でどれも大切なことであると受け止めた。

そして、「今日はそんなキャンドルナイトだから、先生の好きな絵本をみんなに読みたいと思って持ってきたんだ。そして、少し特別。電気を消して、先生の好きな音楽を流すね。みんな、好きなように聞いてね」と話した。すると、友だちとくつつきながら聞く子、友だちと手をつなぐ子、寝転がって頬杖をつく子、保育士の膝に頭を乗せる子と様々であった。そして、先に音楽を流して少しその雰囲気を感じてから、絵本を読み始めた。

絵本は「いいってどんなこ？」を選んだ。読んでいる間、子どもは自由に体勢を変え、友だち同士で目を合わせて微笑んだり、つないだ手をぎゅっと握り直したり、寝転がっていた子が座って膝を抱えたり、とこれも様々であった。保育士は、なるべく子どもの目を見て、ゆっくりと語るように気をつけた。

終わったのち、「おしまい」と言って少し黙っていると、音楽がなっている間、子どもたちは黙っていた。暖かい雰囲気を感じ、その空気に浸っているかのように思えた。そして、私が音楽を少し小さくすると、子どもから様々な反応があった。「すてきなお話しだね」「心があたたかくなっちゃった」「おもしろかったね」「ちょっと笑っちゃったね」「先生の好きなうた、僕も好き」などである。後日、様々な場面で「キャンドルナイトのお話し、好きだったよ」「先生、絵本読むの上



手だからまた読んで」などと声をかけられた。

子どもにとって、絵本はとても身近なものであるが、雰囲気を変えるだけで多くのことを感じ考える機会になると、改めて感じた。“100万人のキャンドルナイト”の趣旨に沿った、良い活動が出来たと思う。今回は遅番の時間帯に、少人数（7,8人程度）で行ったが、今後他の場でも実践したい。

（食育）

目的

- ・日本の食に関心を持ち、食物を育てる。作物が育つ時間を知る。

○野菜の栽培

【年長組】

夏に向けて、なす、ピーマン、枝豆、ミニトマトを育てることにした。

苗植えの様子



子どもたちは「いつ食べられるの?」「どのくらいで大きくなるの?」と興味津々に質問していた。土に触れることに抵抗がなく、積極的に植えていた。



なす

ピーマン

枝豆

ミニトマト

収穫の様子



毎日水やりをして「こんなに早く大きくなるんだね」と成長の早さや、ナスの大きさに驚いて観察していた。収穫したものは、すぐに調理士に料理してもらい、スプーン一杯くらいの量だったが食べた。とても嬉しそうに大切に食べていた。



ミニトマトは色が青色から赤色に変わっていく様子や次々と実っていく様子を見ることが出来た。茎が枯れても実る様子も見ることが出来た。

○オクラの苗木を抜く

【年中組】

夏に向けてオクラを育て、その後収穫をした。収穫したオクラは給食時に和え物として食べ、オクラの茎は花壇への移行のため抜くことにした。



茎を抜いたあと、ついていたオクラの皮が黒くなったのを見て、「この種を植えたら黒いオクラがなるはず」と考えた子どもと一緒に10月末に種を再び植えることにした。時々畑を見に行き、小さい芽を発見するが、その後自然に消滅してしまった。



そのことを通して子どもたちと「どうしてなくなったのだろう」と考えた。子どもたちは「カラスが持っていた」「枯れたのかも」という意見を出しながら話し合っ

て、受け入れていた。
11月末、畑を再度耕して花壇へ移行し、ビオラの苗を植えて、子どもたちと色合いを楽しんでいる。

○チューリップの球根を植える

【年中組】

冬になり、花壇にチューリップの球根を植えることになった。植える前に球根の中には何が入っているのか、植えた後には球根はどうすれば大きく育ち花が咲くか考える時間をもった。子どもたちと話し合いの末、土と水と太陽がなければ育たないと考えつき、他の活動で花壇の近くに行った時もお水をあげたり観察したりしていた。冬も終わりに近づいた頃、小さい葉っぱのようなものが出てきたことに気づき喜んで変化を観察している。



○カブを育てる

【2歳児クラス】

運動会への導入もあり、カブを育てることになった。種から植えることになったので他の種と見比べてみて「ちいさい」「くろいね」と特徴を話しながら、どういう様に大きくなるかということを楽しみにしながら植えた。毎日交代で水をあげて、1週間後に小さな芽が出て、成長を喜ぶことができた。



芽が出てからは大きくなることを楽しみに、さらに水をあげて、「きのうより大きくなったよ」「はっぱが大きいね」と口々に言い合って、成長を喜んでいた。土の中ではカブはどうなっているのかということを想像していた姿もあり、2か月後に抜いたときに小さいものだったができたものを見ることができた。

○出汁のワークショップ

日本の食文化の基である出汁を、プロの料理家から学ぼうと、園でワークショップを開き、年長児が参加した。



鰹節がどのように出来るのか、説明を聞き、においをかいだ後、鰹節を削る体験をした。

自分たちで削った削り節で出汁を取るのを真剣に見つめる。



自分たちの削り節で
取った一番出汁、元か
ら削ってある鰹出汁、
昆布出汁の違いを味わ

った。初めて味わう出汁そのものの味に、「まずーい」という児もいた。これに塩や醤油、味噌を入れることで、慣れ親しんだ味になる事を知った。
伝統の味の成り立ちを知る貴重な体験だった。

(伝統文化)

目的

・日本の伝統文化を体験し、味わう。

○お茶会

床に毛氈を敷いて、正座をする。そこからいつもと違う、お茶の席独特の雰囲気を感じ、子どもたちは真剣に話を聞いていた。年長の子どもたちは昨年、一度経験していたが、だからこそ姿勢を正して真似をしている。懐紙に乗せたお菓子をいただく。「あまーい」「おいしい」と感想がもれる。お茶が運ばれてくる。飲んでみると、「にがい」という児もいるが、「おいしかった」という児もいた。日本の伝統文化を体験する事で自分の中にも日本を感じることが出来た時間だった。





(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- ☒ 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- ☐ 時間外活動の時間を使用
- ☐ ユネスコクラブの活動として実施
- ☐ その他（

）